



新九郎通信

発行 小田原市栄町 2-13-3 (株) 伊勢治書店 3F ギャラリー新九郎 木下泰徳
 メール配信サービスご希望の方は右記アドレスへお申込みを e-mail:kinoshita@iseji.net

ようやく朝夕は風が涼しく感じられるようになり、虫の音が夏の終わりを告げています。「東北を旅するという支援」というコピーにひかれ、青森・岩手に行ってきました。陸前高田の現実には衝撃でした。ベネチア・ビエンナーレ建築展で金獅子賞を受賞した陸前高田に建設中の「みんなの家」は、草に覆われたがれきの山々とダンプカーが行き来する以外、見渡す限りの平地の中、被災地を見渡せる高台に建設中でした。青い空にすくと伸びる丸太の姿は、「奇跡の1本松」と共に、復興を目指す陸前高田の人々の姿と重なって見えました。「建築の役割と可能性を問う」という「みんなの家」が、町の人々の中でどのように生きていくのか10月の完成後もう一度見てみたいと思いました。9月。新九郎では楽しみな秋の展覧会がずっと続くことになっています。皆様のお出掛けをお待ちしています。

新九郎 9月の展覧会のご案内

近隣・友の会会員の展覧会情報

会期 展覧会名	見どころ
 8/29(水)~9/3(月) 現代版画 2012	元永定正最後の版画 草間弥生・豊嘸・横尾忠則 宮迫千鶴・四谷シモン 斉藤義重他
 9/5(水)~10(月) 第26回小田原女流展	西湘画壇で活躍する女流画家 たち、油彩・水彩画「抽象・具 象約25点
 9/12(水)~17(月) '12第60回記念 水曜会洋画展	18名の会員による油彩画 約40点。抽象・具象(風景・ 静物)
 9/20(木) 新九郎デッサン会	18:15-20:45 コスチューム、固定ポーズ 会費 1500円
 9/19(水)~24(月) 第二金土デッサン会 会員展	毎月3回「けやき」で、デッサ ン会をやっています。1年に1 回の会員による作品展です。
 9/26(水)~10/1(月) つばめ写真会写真展	20名の会員による写真展風 景・草花・人物・各地の行事等 自由なテーマの作品約60点

会期・展覧会名	会場
9/20(木)~24(月) 川合昭二&松野光純二人展	ツノダ画廊 0465-22-4250
9/20(木)~24(月) 相原苑江・彩の会水彩画展	アオキ画廊 0465-22-0825
8/29(水)~9/3(月) 第2回澤地弘・道子二人展	飛鳥画廊 0465-24-2411
9/5(水)~10(月) 第24回グループ絵好会展	飛鳥画廊 0465-24-2411
9/19(水)~24(月) 野口均作陶展	飛鳥画廊 0465-24-2411
9/27(木)~30(日) 第35回秀月書道会展	飛鳥画廊 0465-24-2411
8/4(土)~9/17(月・祝) 井上三綱・入生田のトリエから	松永記念館 有料 500円 0465-22-3635
8/29(水)~9/8(土) 山口敏郎 記憶の種 2012	ぎやらりー ぜん 0463-83-4031
9/6(木)~10/9(火)水曜休館 スケッチングウォークの会湯河原G展	湯河原美術館 1F 展示コーナー 0465-63-7788
9/1(木)~30(金)水・第4木休 中藤文彦版画展	ナラヤカフェギャラリー 0460-82-1259
9/5(水)~9/9(日) 西さがみ美術交流展	小田原市民会館 2F 展示室 0465-22-7146

小田原の街なみ再発見！ 国府津・昭和レトロの街なみ 5

暮らし・営みが偲ばれる懐かしい街なみを訪ね歩くシリーズ 加藤恭夫



東海道線と並走する車窓から小田原城が見えたかと思う間もなく、家並の向こうに相模湾が広がる。箱根登山電車からの眺めは楽しい。箱根板橋駅に着く。降りるのは久しぶりだ。だいぶ様子は変わったが駅舎は以前のまま。待合の腰掛に小さな座布団の並んでいるのがうれしい。

駅を出て国道を渡り、細い道を抜けて旧道へ出る。なつかしい街なみが残っていた。旧道の山側にモダンなモルタル建築とどっしりした蔵が並んでいる。今でこそ落ち着いた雰囲気だが、昭和31年(1956)までは、ここを電車が走っていた。「前をすみません。」スケッチをしていると通り過ぎる人が声をかけてくれる。気持ちのよい梅雨の晴れ間のひと時だ。



第6回小田原映画祭オープニングイベント 小田原城銅門野外上映会

小田原ロケ作品「TAKAMINE~アメリカに桜を咲かせた男~」
9月22日(土) 場所: 小田原城銅門枳形 17時開場/17時30分開始

入場無料(事前申込制となります)

【応募方法】

代表者の住所、氏名、電話番号、同伴者(1名まで)の氏名を記入のうえ、往復ハガキでご応募ください。(先着200名・定員になり次第締切)

【宛て先】〒250-8555 小田原市荻窪 300

小田原市文化政策課文化政策課小田原城銅門上映会係

■オープニングセレモニー&ゲストトーク

実行委員長: 阿藤快/ゲスト: 白井貴子ほか



『二宮町ふたみ記念館』訪問

二宮に「ふたみ記念館」があるのをご存じだろうか。国道1号線山交差点を左折し、JRの陸橋を左折し道なりに行くと、小ぶりががっちりしたまだ木の香りのする「二宮町ふたみ記念館」がある。「二宮を愛し二宮に生きた画家」二見利節の美術館ともいえる施設である。

二見利節の作品をまとめて見たのは2回目だ。1回目は20年前の平塚美術館での展覧会だ。今回、記念館で見た作品は、洗練されたモダンな作品が多かったが、左の部屋の「麦」のシリーズの迫力には圧倒された。1960年利節49歳の作品だ。ロウ引きしたような（これはピンセットと脱脂綿で描いた線だった）白い線の下地は恩師井上三綱の影響も感じられたが、一本の麦の穂を力強く自由に描き続けるエネルギーに画家のただならぬ思いのようなものを感じた。今回扣の帳で、平塚美術館で企画を担当された小池学芸員に取材をされるということで同席させていただき『二見利節』の作品と人となりについてお話を伺った。



小池学芸員にとって、この個展は弱冠27歳の時の仕事だったそう。経験の乏しい学芸員にとって企画には相当のご苦労もあったと伺ったが、「ふたみ記念館」の設立にも尽力され、完成をたいそう喜んでいられた。二見作品は弟の清さんが管理していたが、亡くなられた後その息子さんより町に一括寄贈を受けたのだという。実は、没後20年以上たって記念館が建つことはほとんど奇跡のようなことらしい。これも利節が『二宮を愛し二宮に生きた画家』として二宮の人々に広く愛されていたということだろう。

小池さんは、二見作品をアウトサイダー的な要素のある作品だと評された。ふたみ記念館で見た晩年期の作品からは、モダンさどころか土の香りのする印象を持ったが、作家としてはすでに評価され、日動画廊というパトロンを得てヨーロッパを旅したり、安心して制作に没入できたりする環境になっていた頃の作品であったことも影響していたかもしれない。若いころの作品なども一度見てみたいと思った。

生涯で4000枚の作品を残した作家の人生は、まさに波瀾万丈な人生だった。二見は横浜で生まれた。小学校の校長をする父親が42歳で没し、小学校6年の時、母と二宮に戻った。図工で写生した時、青、黄、緑のクレヨンで楕円に塗っていくと見事な竹藪ができていたそのうまさにみんなが驚いたというエピソードを持つ。15歳で日本橋の紙問屋に就職するも、絵やピアノに熱中しやめさせられたところから、画家の道に入っていく。21歳の時、「相州美術協会」（現西相美術協会）に参加し井上三綱の弟子となっている。しかしこの年、恋人沢崎節子が病死。悲嘆にくれた。その後その一字を取って「利節」と名乗るようになったことからその思いが伝わる。その後30歳まで、様々な公募展で入賞を果たしていく。文展に2回連続で特選を受賞するなど評価は着実なものとなった。秋田の大地主のコレクターや後援会を立ち上げ支えてくれた渡辺隆蔵氏（日本興業銀行理事）との出会いなど、二見は作品と共に人に好かれる魅力的な人柄であったに違

いない。30歳で井上三綱の媒酌により赤井芳枝と結婚をしている。

師弟関係にあった井上三綱と二見利節であるが、その作品は似て非なるものと小池学芸員はいう。現在松永記念館（9月17日まで）で開催している三綱展では、三綱のモダンで自由な作風に触れることができる。理性的な三綱に対し二見は感性的で奔放に描いていると小池さんはいう。

しかし、戦争の体験が二見を変えたと言われた。二見は従軍中、米の爆撃を受け右耳を損傷し難聴を患う。ここから絵の描き方も変わっていったという。3日3晩寝ずに描くような狂気の生活ぶりを、周りの人は目にしていた。取材を通し、二見が変な声を出して歩いてる姿を見ても、地元の人たちは排除せず、画家を大事にしていたという。寝食を忘れて制作に没入していた姿を、多くの方がいろいろな形で応援していた。特に、絵を売らなかつた二見の生活は厳しく、近所の人にコマや野菜を分けてもらいお礼に絵を上げたりしていたのだそう。

作家として常に新しい自分を追い求め、そこには描かずにはいられない、描くことが生きることという選ばれた人が辿る深い道を生きていたのだ。1956年アトリエの火災により、大切にしていた作品の大半を失った。さらに、苦しい生活の中、子供の進学の問題があり、妻芳枝とは協議離婚をして、妻は九州の実家の支援で子供を養育した。

一人になった二見は、母の助けを借りて一段と画業に励む。ここから二見は「在る・在らず」の追究にまい進していく。記念館で見た「麦のシリーズ」はちょうどこの時期の作品だった。小池学芸員はこの時期の二見をこうあらわした。描くという身体感覚で外の世界とつながっていたのではない。描くことで自分が存在する。描いていないと死んでしまう真のアーティストであったと。この時期、画面の題材もいろいろと変化している。



黒いタールをしみこませたルーフィングという屋根材にクレヨンで描いた作品は、全10巻が制作されていた。この巻物には二見の追い求めた誰も目にしたことのない世界が広がっていた。二見は、死の直前まで枕元に置き、生前最も大事にしていた作品となった。記念館には、この作品の縮小版が展示されていたが、今一度見る機会を得たいと思う。

これからの美術館は名品主義であってはやっていけない。郷土の画家、地域の画家の顕彰やデータ作りなど、文化の地産地消の時代だと小池さんは言う。まさに同感である。魅力あるワークショップやボランティアの育成と共に、多くの人を巻き込むコーディネートや育てていくことが必須であり課題もある。平日で観客もなくゆっくりとい時間経過ができたが、この記念館にもっと気軽に多くの人が集い、作品を前に二見を語り合えたら・・・二見を支え受け入れた町に、ふたみの記念館ができたことを、一番喜んでるのは二見本人なのかもしれない。生誕100年の記念すべき年に、改めて「二見利節」について知る機会をいただけたことに感謝である。（新九郎友の会 木下和子）*参考 二宮町近代史話（昭和60年11月刊行）ふたみ記念館チラシ



「十和田市現代美術館」を見てきた。以前から気になっていた美術館だ。行政改革により空き地の増えた官庁街通り全体を美術館に見立てたプロジェクトを展開している。「現代美術館」を中心に、「野外展示」「企画展」と連動した「まちなか展示」を開催している。人口6万5千人の地方都市を現代アートで活性化させようというのは、随分大胆な計画のように思えたがそこに関心があつた。十和田市は奥入瀬・十和田湖という自然観光地を控えた町である。街は本当にアートにより活性化しているのか、現代アートは街の顔を変えているのかをこの目で確かめて見たかった。

美術館は桜と松の二重の並木が「一キロに及ぶ日本の道百選」にも選ばれた街路にあつた。前庭にはチェ・ジョンファの、カラフルな花に全身を覆われたフラワー・ホース（馬の像）が前足を高く上げ歓迎してくれた。通り沿いには大小様々な箱型のギャラリィが14棟並び、間を廊下でつながり作りになっていて、箱物がどんと立っている違和感はなく街の景色に溶け込んでいた。前面がガラス張り、外から中の展示作品が見える棟もある。エントランスホールに入ると、床一面に色とりどりのビニールテープで、リズムカルなストライプ模様を描かれている。ジム・ランビの作品だ。艶やかで美しい床が作品だった。最初の展示室に入ると衝撃！突如高さ4mものロン・ミュック作の巨大な女性像に見下ろされる。皮膚、皺、透き通る血管、まさに本物そっくりであるが、そのスケールに現実とは違う不思議な感覚を覚える。真っ白な部屋の天井にアザラシが天井裏を見ているのは栗林隆の作品だ。白いテーブルの上に置かれた椅子に立ち、天井の穴から覗くと美しい景色に出会える。実に楽しい参加型作品だ。その他国内外のアーティストの作品が恒久展示されている。道を隔てた美術館の対面側の芝の広場には、草間彌生のかぼちや・キノコ・女の子・犬のオブジェを中心に5人の作家の野外作品が並び、無料で市民がいつでも気軽に楽しめるゾーンになっている。子供たちが楽しそうに走り回っていた。

栗林隆は、日本初の個展を開催中だった。黒土の山々に霧が立ち込める幻想的な作品は圧巻であった。栗林の作品は、街中の店舗やお茶屋の地下にも作品が展示され、こうした街中の作品を見て歩くことで、町にも自然に足が向く仕掛けになっていた。

私たちが訪ねたのは平日であったが、夏休みのせい、若者たちのグループ、カップル子ども連れの家族が多かった。青森県立美術館や岩手県立美術館に比べると明らかに若い層が集まっている活気のある美術館であった。混み合う程ではないが、ギャラリィ、カフェ、ミュージアムショップにもそれなりの人がいた。しかし通りは夏の暑さのせい、人影はまばらであった。美術館の前にはアイスキャンデー売りのおじさん、「若い人がよく来ますか。」と聞いてみたが、はつきりした返事はなかった。

正直まだ、直島や金沢21世紀美術館のような人気スポットにはなっていないように感じた。しかしアート大好きな私には、夢のような空間が広がっていた。近隣の若者はこれからも必ず集まって来るに違いない。特にこのような環境に触れた子供たちが、どのように育っていくのか、そこから生まれて来るものが必ずある筈である。大きな可能性を秘めた十和田のこれからが楽しみである。④